

## 芸術学部 デザイン学科 椅子資料解説 (1)

デザイン学科スペースデザインコース

平田 克二・車 政弘

Commentaries of chair collection in Dept. of Design Faculty of Arts. (1)

by Katsuji HIRATA and Masahiro KURUMA

### 椅子における造形思潮の変遷とその社会背景

椅子が大量生産され始めたのは、産業革命後、大量の都市労働者が現れたことに始まる。それ以前は農村で使われる椅子や家具類は少なく、ほとんどが自給自足であった。その一方で、貴族や王室には家具を作る専属の職人がおり、華やかな家具を生んできた。しかし、産業革命によって資本の集中化と労働力の増大により大量の都市労働者が出現し、商品需要は急激に高まった。実際、その当時の機械による工業製品の品質は粗悪で、表面は前時代の職人の作品の模倣で、かつ不要の装飾を付け足し、その過剰な装飾による形態は醜くかったが、需要と供給のアンバランスにより、質の低いものでも作れば売れるという状況を生み出した。こうした動きの中でジョン・ラスキン(John Ruskin 1819-1900)や、その思想を受け継ぐウィリアム・モリス(William Morris 1834-1896)などの思想家や芸術家が生まれ、機械生産の否定や新しい様式を生み出すことになった。

モリスは、産業革命によって出現した都市労働者に対する人間疎外に憤慨し、中世の田園生活こそ理想的な人間生活であるとし、人間を取りまく環境を美的に改善することで、人間らしさを取り戻そうとした。彼は機械により生産された過剰な装飾を受けたものや、機械による生産自体を否定し、職人の洗練された技術により織物や壁紙、ステンドグラス、家具などの日用品の美的価値を芸術の領域にまで高め、自らの「モリス・マーシャル・フォークナー商会」を通し社会に良い趣味の日用品を提供しようとした。しかし、その作品は

機械による生産を否定したがため高価で、モリスの思いとは逆に、万人のために作ろうとしたものが、成金の愛玩品となってしまい、成功には至らなかった。しかし、モリスによって起こされたアーツ・アンド・クラフツ運動(Arts and Crafts movement)は、ベルギー・フランスを中心として起こったアール・ヌーボー(Art Nouveau)、ドイツ・オーストリアのユーゲント・スティール(Jugendstil)など様々な近代造形運動を引き起こすことになった。

アール・ヌーボー様式は19世紀を支配したアカデミズムと、それにともなった古典主義、様式折衷主義に対する抵抗であった<sup>1)</sup>。今までの重々しい様式からの脱却として、その過剰ともいえる植物等をモチーフとした有機的な曲線による装飾や鉄・ガラスなどの近代的な素材を使い、19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパで大流行した。工芸的・装飾的な価値により当時の中産階級には支持されたが、アール・ヌーボー様式は歴史主義と近代運動の「過渡的現象」にしか過ぎず<sup>2)</sup>、歴史主義様式に対抗する装飾と形態にしか価値を見いだせず、機能性と生産性に背を向けたことにより衰退した。

生活様式が合理化と機能化の方向に進むにつれ、表面上の装飾よりもその形態、構造、材料の質感に美しさを求め、より機能性、生産効率を重視することになった。家具は金属やガラス・合板などといった工業材料を用い、より新しい形態を生み出していった。そして、より機能性と構造の単純化を求め、形態は抽象化していき、オランダのロッテルダムでキュービズムの理論と生活環境の抽象

化を進めたデ・スタイル (De Stijle)、機能主義のデザイン理論とその実現を求めたドイツのパウハウス (Bauhaus)、家具を室内空間の設備要素とみなし独創的な家具論を展開したエスプリ・ヌーボー (Esprit Nouveau) のル・コルビュジェなどは、20世紀の工業化時代を先取りした家具デザインを発展させた。1940年代からアメリカでは、工業生産に裏付けられた機能主義と独自のデザインによるアメリカン・モダン (American Modern) が展開され、一方、北欧では伝統の木工技術と人間工学に裏付けられたヒューマンでオーガニックな曲線を使ったスキャンディナヴィア・モダン (Scandinavian Modern) が展開され注目されている。そして現代において生活のシステム化と合理化がより一層進展し、機能主義を超えた個性的な家具様式が求められているといえよう<sup>3)</sup>。ポスト・モダン (Post-Modern) 運動をはじめ、新しい装飾主義運動が時代の造形思潮として現れてきている。

このように椅子のデザインは時代の生活様式をよく表し、かつ当時の社会背景も知ることが出来る。椅子はデザイナーの芸術思想、地域性、時代の造形思潮、技術の革新、新材料の開発により様々な形で、デザインされ我々の生活と密接に結び付いているといえよう。

### 解説

1990年現在、本学芸術学部の椅子資料の標本数は、48種類52点となっている。ミヒヤエル・トーネットの曲木椅子「No. 14」からマーク・ニューソンの「エンブリオ・チェア」まで、近代から現代までの様々な椅子がある。そして素材に関しても、ソリッド材・曲木・積層材・成形合板などの木材や、各種金属・プラスチックなど技術の発達により現れた新素材を使ったものもある。

この椅子資料解説は16脚の椅子の解説で、最初にその作者名と作品名、発表年、様式を表記し、次に作者と作品の解説を行い、最後に製造会社を記す。なお、椅子の実測図の製図はデザイン学科インテリアデザインコースの第3学年の学生、古賀龍生・白水富美雄・鶴田博巳・江上竜生・新庄

章史・荒木崇・大神泰子・川島修一・茂村巨利・柴村毅彦・志原未美・小金丸明美・楠千春による。

### 1

ミヒヤエル・トーネット  
(Michael Thonet 1796-1871)

「トーネット No. 14」

「#14 Chair」

1859

[Arts and Crafts]

ミヒヤエル・トーネットは1796年ドイツのポツパルトに生まれ、家具職人として修行、ビーダーマイヤー様式の家具を製作し、1830年にはその家具の部材を「湾曲し、互いに接着された薄板」を用いて作る実験を始めた<sup>4)</sup>。それは、同じ幅の積み重ねられた薄板の帯を、液状の接着剤 (膠) の中で煮て、この接着剤の窯から取り出した薄板を、必要な形に湾曲させ乾燥させ、家具部材とした。ただし、この方法では一次曲線しか出来なかった。しかし、彼はそうして作った部材を幅に対して直角に薄く切り、それを同じ方法で再び湾曲させることを試み、二次曲線を持った家具部材を開発した。1835年までには「積層曲加工」という木材加工法を確立しフランス、イギリス、ベルギーにおいて特許申請を試みた<sup>5)</sup>。

1842年は彼はオーストリアの宰相、クレメンス・ローター・ヴェルツェル・メッテルニヒ侯に招請を受けウイーンに家具工場を作り、1842年に「もろい種類の木材を科学的機械的方法で、好む形に湾曲させる。」という特許の請願をした<sup>6)</sup>。1843年頃からリヒテンシュタイン宮の寄木細工と椅子を製作し、その室内の後期ロココ装飾の過剰な装飾に対し、寄木細工の床と曲木の椅子は滑らかな螺旋と曲線からなる簡潔な模様とで製作され<sup>7)</sup>、その形態は、後のトーネットの家具のデザインにつながった。

1851年のロンドン第一回万国博覧会において工業製品の部門での最高賞、銅メダルを受賞し、彼の積層曲加工の椅子は高く評価され生産量も増えた<sup>8)</sup>。しかし、「積層曲加工」では、乾燥工程のた

め、長期間の海外輸送や湿潤な気候の場所でははがれたりする欠点や、加工工程が複雑で、曲げ加工の最中に亀裂、ねじれが発生するという欠点があった<sup>9)</sup>。この頃から需要に追いつけなくなっていたので、工程の単純化と欠点の様々な改良が試みられ、単一の材料による曲げ加工が考案され、脚や背の部材にはブナ材等の棒材を熱と蒸気によって柔軟性を与え、曲げ治具によって湾曲させる方法を考案した。この加工法は、1853年に「水蒸気あるいは沸騰した液体の作用によって起こる湾曲木材からなる椅子と机の脚部の製作について」の特許が許可された。そして工場を近代化し、加工法を発展させていった。

そして需要の増加による大量生産に向く家具の設計を開始し、試行錯誤のうち、今まで開発した曲木の工法を駆使し、1859年に「No. 14」と呼ばれる椅子を作り上げた。この椅子は大量生産のために構造の単純化と生産の工業化をはかり、改良をかさね、機能性の向上と手工芸的な美意識により形態的な完成をみた<sup>10)</sup>。その近代的な生産法と値段の安さ、機能性の高さ、軽量さ、洗練された造形は後の建築家達に大きな影響を与え、「もし一人の建築家が、この椅子よりも、5倍高価に、3倍重く、その半分の座り心地を持ち、4分の1美しく作ったとしても、彼は名をなすことが出来たであろう。」とデンマークのデザイナー、ポール・ヘニングセンは言っている<sup>11)</sup>。

「No. 14」の椅子は一体化された背部と後部脚・背補助部・座席枠・脚輪（脚部補強）・前脚部の6つの各構造材により構成され、それらはそのまま梱包され、現地で木ネジによって組み立てられるという「ノックダウン」の形で世界中に輸出され、1930年までに5,000万脚以上が生産された<sup>12)</sup>。ミヒャエルの引退後、トーネット社は5人の息子により経営され、発展を続け、ル・コルビュジェやマルセル・ブロイヤーなど建築家の家具も生産するなどして家具の近代化に多大な貢献をした。

…トーネット社製

## 2

チャールズ・レニー・マッキントッシュ  
(Charles Rennie Mackintosh 1868-1928)

「ヒルハウス ハイバック・チェア」

「Hill House High Back Chair」

1902

[Glasgow・Style]

チャールズ R, マッキントッシュはイギリスのビクトリア朝時代の代表的な建築家で、水彩画家でもあり、他にテキスタイルや壁紙ポスターなどの平面的なデザインも手掛け様々な作品を残した。

スコットランド、グラスゴウのグラスゴウ美術大学夜間部で建築を学び、校長のフランシス・ニューベリー (Francis Newbery) の指導のもと、ハーバード・マクネア (Herbert Macnair 1868-1955)、マーガレット、フランシス・マクドナルド姉妹 (Margaret・Francis Macdonald 1865-1942・1874-1921) と共に4人のマックは「グラスゴウ4人組」(Glasgow Four) を結成、ケルトの伝統的な曲線と幽美な装飾を使い独自の造形を作り上げ、その女性と植物の曲線をモチーフにした官能的な装飾により「幽霊派」とも呼ばれた<sup>13)</sup>。「4人組」は、マッキントッシュがマーガレットと、マクネアがフランシスと結婚した事により解散。その後彼は建築と室内装飾にスコットランドのヴァナキュラーな形態、近代的な材料、彼の造形美意識を組合せ新しい様式を作り上げた。妻マーガレットは主に石膏のレリーフ・パネルを製作し、その官能的な装飾はしばしば彼の設計した室内に置かれた。

グラスゴウ美術大学の校舎は彼の公共建築作品の代表的なものであり、彼の独自の造形意識を示すものである。この作品により彼は歴史主義様式と近代を結ぶ建築家として高い評価を受けているが、この業績はミース・ファン・デル・ローエの「彼は建築を純化した」<sup>14)</sup> という言葉からも推しはかれる。

彼は当時、イギリス本国では認められなかったが、オーストリアの分離派「ウィーン・ゼセッショ

ン」(Sezession Wien)には熱狂的に迎えられ、特に、ヨゼフ・ホフマン (Joseph Hoffman 1870-1956)らに、その唯美的で神秘的な造形は大きな影響を与えた。

彼の造形的な特徴は、3つの時代によって歴史主義様式、アール・ヌーボー。反アール・ヌーボー、幾何学的抽象様式に分けられるが、「ヒルハウス・ハイバック・チェア」(ラダーバック・チェアともいう)は2番目の様式と3番目の様式の移行期間の作品である<sup>15)</sup>。

この「ヒルハウス ハイバック・チェア」は彼の有名な住宅作品「ヒルハウス」(1902-1904)の主寝室用にデザインされ、椅子としての機能より室内装飾におけるデザインの統一と、空間演出の一つの要素として抽象化された形態の美しさを強調したものである。この椅子は主寝室の戸棚の間の空間と、窓と窓の間の柱の部分に置かれ、白や淡い色で塗られた官能的な曲線(現在、補修の際に失われてしまったが当時は白い壁に薔薇の花を抽象化したステンシルが施されていた)で装飾された室内を、水平垂直線を強調した厳格な幾何学模様の椅子で清廉さを図り、かつ微妙なつりあいを見せている<sup>16)</sup>。空間を2つに分節するため、その位置は部屋全体の構成から割り出され2脚対になって置かれている。このような空間の分節化は、日本芸術からの影響と思われ、シンメトリーとアシンメトリーの微妙なバランス感覚は、機能主義建築を思わせる厳格性と微妙な曲線の官能性との不思議な融合である<sup>17)</sup>。彼の家具は機能的な要求から離れる事により可動性の「彫刻」として空間に作用し「空間の透過性」を生み出し<sup>18)</sup>彼は、家具を空間を構成するための要素として独特の耽美な空間を作り上げた。この「ヒルハウス ハイバック・チェア」の構造的な特徴は、オーク材に黒のステインをかけることにより壁面から浮きださせ構造材の垂直線を強調している。

受ける印象ほど直線で構成されているのではなく、格子状の背もたれの部分はカーブし、なおかつ後脚から上に伸びる背柱の断面は下部の楕円形から徐々に円状に細くなっている。この構造から

示されるようにこの椅子は構造的に剛性を確保しながらも出来るだけ構造材を細くみせている。その限界までそぎ落とされた構造材により、重さは3kgしかない。

現在カッシーナ社によりレプリカが生産されている。レプリカはトネリコ材にブラックエボニー塗装で座はグリーンベルベット張り。

…カッシーナ社製

### 3

#### フランク・ロイド・ライト

(Frank Lloyd Light 1867-1959)

「ミッドウェイ1。」

「Midway-1」

1914

[International・Style]

フランク・ロイド・ライトは有機的建築を唱えたアメリカの建築家で、ミース・ファン・デル・ローエ (Mies Van der Rohe 1886-1969)、ル・コルビュジェ、アルヴァ・アアルトと並び20世紀の建築家の四大巨匠と呼ばれる。シカゴ派のルイス・サリヴァン (Louis Sullivan 1856-1924)の弟子であり、1932年にタリアセン・フェローシップ建築学校を設立し、多くの建築家を育て建築教育にも尽力した。

彼は、建築構造と内部空間とそれを取り巻く自然とを美的で機能的な形態に調和させ、有機的統合を画り、近代の新しい技術や材料を駆使し作り上げたその形態と機能は、多くの建築家に影響を与えた。彼の住宅は人間の心身の十分な発展を得るために、住まいのあり方を考慮し自然との有機的な調和をはかることが重要とし、初期の住宅は草原地帯に多く建てられ「草原住宅」(プレイリー・ハウス)と呼ばれその水平線を強調した形態、自由なプラン(平面)、素材により生活空間と自然との有機的なつながりを実現させた<sup>19)</sup>。彼の最も有名な住宅建築「落水荘」(1936)は彼の思想「自然と生活空間の有機的統合」をその美しい幾何学形態で果たしたといえよう。彼は20年後にこの「プレイリー・ハウス」形の住居を振り返り、

自分の居住デザインの指針原理を9つ掲げその8で「室内装備を建物そへ自体と一体化し、それらの備品を機械仕事で製作しやすいようデザインし、これによって室内装備をできる限り、有機的建築の一部としてまとめあげる。やはり、直角と四角い形態。」と記した<sup>20)</sup>。このことから、彼の室内空間は建築全体の中の一要素として、家具は建築と生活にいかにか有機的に結び付くかということと、生産性と装飾の問題についても考慮していた。

「ミッドウェイ1.」と呼ばれるアーム・チェアは、シカゴのミッドウェイ・ガーデン計画 (1913) のために設計された椅子で、その直線的な幾何学形態は美しいプロポーションをしている。この六角形のモチーフは彼が旧帝国ホテル (1922) の建築と家具に使ったもので、他の多くの建築にも使われ、彼がこの装飾パターンを好んで使用していたことが分かる。「クーンレイ邸」(1908) や「ロビー邸」(1908) の直線的な構成はライトの建築における装飾パターンや家具と空間装飾との結び付きを強く示している。しかし、彼は「家具に多く関わりすぎ汚点を残した」と後悔したというが、彼の建築にも通じるすばらしい家具も多い。

彼の家具はカッシーナ社によりレプリカが生産されている。サクラ材にナチュラル塗装仕上げ、座はブルーのファブリック。

…カッシーナ社製

#### 4

ル・コルビュジェ シャルロット・ペリアン

ピエール・ジャンヌレ

(Le Corbusier 1887-1965)

「角度調節自在の寝椅子」

「Chairse Long (LC-4)」

1928

[Esprit・Nouveau]

ル・コルビュジェは画家オザンファン (Amede Ozenfant 1886-1967) と共に〈ピュリズム〉純粋主義運動を始めエスプリ・ヌーボー (Esprit Nouveau) を創始した。1927年に「近代建築の5原則」を宣言し、多くの建築家に衝撃を与えた。

彼は、バウハウスの機能主義の量産デザインに反発し、家具を建築の住空間全体の立場から有機的に考える立場を主張した<sup>21)</sup>。

彼はトーネットの曲木椅子をエスプリ・ヌーボーの展示館に置き、その理由として、「我々は曲げ木の飾り気のないトーネットの椅子を置くことにしたが、それは最も安価なものと同じくありふれたものであり、数限りない同種のものが、このヨーロッパやアメリカ大陸で使われていて、しかも品格を失っていないからである。」<sup>22)</sup>と語ったという。このことから彼の家具への思いが感じられよう。コルビュジェが愛用したトーネットの椅子は「ウーン・チェア」と呼ばれる「No. 6009」で、このタイプはスペインのアントニオ・ガウディ (Antonio Gaudi 1852-1926) も愛用したことで知られている。

「建築は住むための機械」という彼の建築概念から家具を建築の設備要素として捉え、全ての家具を座具・ケース・テーブルの3つの基本カテゴリーに還元して、これらを企画化することによって、それぞれ基本となる家具を自由に組み合わせ個性的な生活空間を創り出した<sup>23)</sup>。彼は「椅子を座るための機械」とであると定義し、従兄弟のピエール・ジャンヌレ (Pierre Jeanneret 1896-)、シャルロット・ペリアン (Charlotte Perriand 1902-) との協同で家具を設計した。

「角度調節自在の寝椅子」(カウボーイ・チェアともいう) はスチールパイプと皮革からなり、以前にスチールパイプの椅子を発表していたスタムやブロイヤールとは違い、その骨格に皮革やその他の豪華な材料を付け加えコントラストをつけた<sup>24)</sup>。姿勢に応じてこの寝椅子は角度が調節出来るため、「角度調節自在の寝椅子」と呼ばれ、そのスチールパイプと皮革の素材の対比の妙と緩やかなカーブにより構成された支持体の優雅さ、横臥面の休息しやすいよう身体に合わせ曲げられた人間工学的な配慮とその美しい形態は、彼の美と機能性の追求により生まれたといえよう。クロームメッキのスチールパイプで構成された上部を安定して支えるために架台に張られたゴムチューブとの摩擦

により確保されている<sup>25)</sup>。架台は黒く塗られ、あたかも上部の軽やかな造形の支持体が空中に浮かんでいるような錯覚をおこさせる。この椅子はトーネット社のために金属ではなく曲げ木を構造材に使う案の図面も残されている<sup>26)</sup>。この寝椅子の構造とその形態の純粹性、機能性は後の家具デザインに大きな影響を与えた。

彼のデザインした鋼管製家具は当初トーネット社で生産されていたが、溶接部分の多さのためにコストが高く、プロイヤーのものほど売れず商業的には失敗だったという<sup>27)</sup>。現在、カッシーナ社、ホームライン社などで生産されている。

…ホームライン社製

## 5

### マルセル・ブロイヤー

(Marcel Breuer 1887-1982)

#### 「チェスカ・チェア」

「Cesca Chair」

1928

[Bauhaus]

ブロイヤーは1919年ドイツ・ワイマールに設立されたバウハウスの第1期生として、教育を受け、1924年22才でバウハウス家具部門を担当し翌年、デッサウに開校された市立バウハウスに移る。1937年にグロピウス(Walter Gropius 1883-1969)の招きで、アメリカ・マサチューセッツのハーバードに渡った。彼のデザインの特徴は、形態の機能性と、量産化による生産の経済性を追求し、そのデザインは、簡潔で軽快で優雅なプロポーションである。

最初に鋼管を家具の構造材に使ったのは自転車工場主で多くの発明をしたウィリアム・スターレイの1880年の事務用家具とされている<sup>28)</sup>。「カンティレバー・チェア」は1924年に建築家マルト・スタム(Mart Stam 1899-)が自動車の補助椅子をヒントとして鋼管を曲げ構成し座と背を付け椅子としたが、それはガス管を継ぎ手でつないだだけの黒い椅子で、パイプの間には細長い布地を編んで作ったキャンバスを渡し座部と背もたれの部

分だけに幅広のゴムを渡し、弾性を与えようとした。しかしその形態は後の定型となったが美しくもなかったし弾性もなかった。これを1926年にシュトゥットガルトのドイツ工作連盟(Deutscher Werkbund)のヴァイセンホーフ・ジードルング展に発表した。ミース・ファン・デル・ローエは鋼管構造に弾性があることに気づきスタムの使った形態をより美しくした椅子をその2週間後に発表した<sup>29)</sup>。

管状の鋼鉄を構造材とし、その構造材の強靱で柔軟性を持つこの「カンティレバー(片持ち梁)」形式は、その当時、最も賞賛された椅子デザインの新機軸で、そしてその構造をもとにし鋼管を湾曲させて作られたミースの「M・R・チェア」1926年等に続き、彼は1928年に「チェスカ・チェア」を発表した。「M・R・チェア」は片持ち梁は前面で半円形をなしスプリングの作用を果たし、その構成は幾何学形態で鋼管の輪郭は、流動的で美しい構成美を見せている。彼の「チェスカ・チェア」はローエのものより鋼管の部分が直線的で機能の上でも卓越しており、オフィス・チェアとしてヨーロッパやアメリカで人気を博した<sup>30)</sup>。スタムの「カンティレバー・チェア」との違いはスタムのものより大型で、背のパイプが後ろに曲がっていることである<sup>31)</sup>。このように同じ材料と構造を用いてもデザイナーのフィロソフィーの違いがあり興味深い。

ベルリンのバウハウス記録保管所のディレクター、ハンス・ウエングラーはカンティレバーの鋼管椅子の作者は誰かとの問いに「ブロイヤーは1925年、デッサウにおいて、初めてのスチールパイプの椅子を設計した。この新しい材料は、質量の軽減を可能にした。計算上の観点からみると、この最初のスチールパイプ製の椅子は、慣習的な木製の椅子に近かった。1927年、椅子の設計に市場に出回っていた口径のガスパイプと符合するスチールパイプを利用し、継目のないパイプのように湾曲したスタムが、私の見る限り最初の作者である。これにより、空間に浮かぶ座板の椅子が可能となり、脚は床の上に点として立っているの

はなく横に置かれている。スタムの椅子は、私の知る限りでは、1927年、ヴァイセンホーフ住宅地で公開された。今日、トーネット社が作者スタムの名で、そしてノル・インターナショナル社が作者プロイヤーの名で生産している。1928年の椅子の論議は、構造、脚の形においては明らかにスタムのアイデアに帰しているが、曲げ木と籐の座面と背部の形と組合せは、プロイヤーが決定したものであるということになる。<sup>32)</sup>と語った。

このように鋼管パイプによるカンティレバーの椅子は幾多の論争と10年を越える裁判により、スタムの「カンティレバー・チェア」が、1961年ドイツ最高裁判所により、美術権（意匠権）を与えられ<sup>33)</sup>片持ち梁構造の椅子の原型とされ、この論争に決着をつけた。

「チェスカ・チェア」の形態の特徴は、ケーンが張られた背のわずかなカーブや杵の3/4円の断面、座の先のフレームのパイプに沿ったカーブなど独特で繊細なものでカンティレバーのパイプが床面と接する部分も、微妙にアールが付けられ、4点での接触面が確保されるよう配慮されている。

彼は1925年に発表した「ワシリー・チェア」を当初、自分の会社で生産していたがうまくいけなくなり、1928年にチェスカチェアを含めて全てのデザインをトーネット社に譲渡し、同社はこのときから19種のプロイヤーの作品の生産を開始し、曲木ではなく本格的なスチールパイプの加工部門を発足させた。当時のパイプはニッケルとクロームメッキで、経済的・清潔・軽量・簡単な手入れという歌い文句にも関わらず、実際には安い曲木の椅子の3倍以上のコストがかかったといわれている<sup>34)</sup>。

…ガヴィーナ製

(ノル・インターナショナル社のブランド)

## 6

アルヴァ・アアルト

(Alvar Aalto 1898-1976)

「アーム・チェア 41」

「Armchair-41」

1929

## [International・style]

アルヴァ・アアルトは、1921年フィンランドのヘルシンキ工科大学を卒業、建築家として活躍し、インターナショナルスタイルの建築にコルビュジェやグロピウスとは違う方法で寄与し、彼の建築は地域の自然と密着した構造と形態で建築と人と自然との調和を画った。彼はフィンランドの風土や土着的な形態から育まれた、柔らかい曲線と有機的な形態をあたたかみのある素材で構成しそのアプローチは「大地の彫刻」<sup>35)</sup>と呼ばれた。

彼の家具デザイン作品の全てに一貫している特徴は、建築と同じように特定な用途に限定されず、家具が使われる環境、また使う人々に対するデザイナーとしての関心の深さにある<sup>36)</sup>。最初彼は、鋼管製の片持ち方式の椅子の骨組みに座部と背もたれを成形合板で作り、その弾力性のある合板の座と背の椅子は後の木製の片持ち椅子のヒントを彼に与えた。彼は北欧ではスキーの板に用いていたカバ材を利用し、その弾力性に富んだ性質をより強くするために積層材とし、椅子の構造材として使い<sup>37)</sup>、家具の基本的な構成材料を合板で波状の形やりボンのようなフレームにした。そして、1930年代の中ごろ彼は合板曲げ木の使用法をさらに進め、合板の杵をやめて、自在片支えの椅子を作り上げた<sup>38)</sup>。このように、彼は木材を近代的な材料とするため、様々な加工法を模索し木材の成型曲げ加工を確立した。

この「アーム・チェア41」は、「パイミオ・チェア」とも呼ばれ、彼の有名な建築作品「パイミオ・サナトリウム」のラウンジ・チェアとしてデザインされた。このアーム・チェアの座から背は、成形合板により作られ、それ自身がたわみによりクッションの役目を果たす構造になっている。その座と背の合板も部位により厚さを変えている。肘掛けと足になる部分は曲げ木により台形状に成形され、美しい曲線を描いて剛性に富む。このサナトリウムのためにデザインした積層材による椅子は、「材料革命」の栄誉を得た<sup>39)</sup>。彼は他にもカバ材の積層材を使いスタッキング・スツールやダ

イニング・チェアを無駄なく、機能的にデザインした。この「アーム・チェア41」は成形合板による椅子のパイオニアと言える。そして優雅な有機的な形態と、その地域の環境への配慮、合理的で機能も重視したデザインと彼の思想は高く評価されている。

…アルテック社製

### 7

ハンス J. ウェグナー

(Hans J. Wegner 1914-)

「ピーコック・チェア」

「Peacock Chair」

1947

[Scandinavian・Modern]

ハンス J. ウェグナーはデーニッシュ・モダンを代表する世界的な家具デザイナーである。1914年デンマークのトンダーで生まれ、1928年14才で家具職人のもとで家具見習い職人となり、22才の時コペンハーゲン、デンマーク工芸学院で家具デザインを学び、1938年アルネ・ヤコブセンとエリック・ムラーのアトリエで働き、1943年工房を設立し、1946年より母校の教授となりスカンディナヴィア・モダンの家具の発展に尽くした。

彼の家具デザインはデンマークの伝統的な木工職人によるクラフツマンシップと、近代の生産性と機能性、彼の美意識が見事に融合し、見る者を引き付ける。彼はよい材料をいかに効率よく使うことが出来るか、人間が最もリラックス出来るフォルムは何か、丈夫であるか、安全か、美しい形態か、シンプルか、その形態はタイムレスかなど、厳しい課題を解いていく過程でひとつずつデザインを生み出し、またそれに基づいて新しい技術や材料を生み出した。彼は若い頃、彫刻家を志していたため人体解剖学の基礎も知っていたので、その調和の取れた彫刻的形態と座り心地の良さも納得できるであろう。彼は1つの椅子を完成させるまで、長い懐胎期間をかけてデザインを追求し、合理的で美しい形態を生み出した<sup>40)</sup>。彼のデザインした一連の椅子において、特徴的なのは背から

肘の部分は特別な注意が払われていることである。その最端部の彫刻的な処理は、彼独特で緊張感のあるカーブでつながれ、美意識と機能的な要素を満たしているといえよう<sup>41)</sup>。このように彼の作品の多くが完成された形態美と機能の高さを持ち、椅子のデザインが無尽蔵であることを証明した<sup>42)</sup>。彼の美意識によって材料とその可能性から引き出される芸術的な価値を椅子に与えている<sup>43)</sup>。

作品の多くはニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、メルボルン・インターナショナルギャラリー、ロンドン・ビクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムなどの永久展示品として買い上げられている。トリエンナーレ・グランプリ (1953)、ロンドン王立工業デザイナー賞 (1959)、アメリカインテリアデザイナー協会国際デザイン賞 (1967) 等受賞は数多い。

この椅子は、イギリスの伝統的な家具「ウィンザー・チェア」を基にしてデザインされ、彼の伝統的な家具に対する研究の深さを感じさせる。その孔雀が羽を広げたような形から「ピーコックチェア」と呼ばれる。また笠木の形が弓に、背束が矢に似ていることから「アロー・チェア」とも呼ばれる。弧を描いた背の部分は蒸気によって曲げられたトネリコ材で肘掛けの部分はチーク材である。

…ヨハネス・ハンセン社製

### 8

ハンス J. ウェグナー

(Hans J. Wegner 1914-)

「ザ・チェア」

「The Chair」

1949

[Scandinavian・Modern]

ウェグナーは様々な伝統的な家具のリデザインを行い、それだけでなくより現代の生活に適合する家具とした。

彼の有名な作品である「チャイニーズ・チェア」は中国の明式家具の円椅をモチーフとし、後によりそのモチーフをより洗練させ「Y・チェア」(デ



クラティブ・チェアとも呼ぶ) と呼ぶ椅子を発表し、彼の家具デザインの奥の深さを示した。1949年に発表された「ザ・チェア」は「チャイニーズ・チェア」、「Y・チェア」と使ったデザインモチーフを完全に消化し、彼の椅子デザインに対する課題を完全に近く実現し、その完成されたデザインの美しさ、加工技術の確かさ、品質、座り心地等の機能性の良さから、「ザ・チェア」「クラシック・チェア」と呼ばれ、椅子の中の椅子として評価が高い。

この椅子の肘掛けの部分は木材の資質を無理なく使って確実な手法で表情の豊かな曲線に仕立て木目も慎重に取り扱われ<sup>44)</sup>、その職人的な木工技術の高さとその木のあたたかみを活かした彫刻的な形態は発表後40年たった今でも美しく、北欧の木への扱いと、彼のデザインへの追求の深さが感じられる。

…ノル・インターナショナル社製

## 9

## ハンス J. ウェグナー

(Hans J. Wegner 1914-)

「バachelラーズ・チェア」

「Bachelor's Chair」

1953

[Scandinavian・Modern]

「バachelラーズ・チェア」(バレット・チェアともいう。バレットとは従者の意)は「独身者のための椅子」という意味である。この「バachelラーズ・チェア」は、ユニークな形態で、その機能はユーモアに満ちたもので、背の笠木はハンガー、座面内は小物入れ、座板を起こすとズボン掛けとなる。この椅子の形態は木に対する加工技術の確かさと、ウェグナーの家具の特徴である彫刻的な美しい曲線とで構成され、日用品としての椅子を芸術作品の域まで高めているといえよう。

…ヨハネス・ハンセン

またはノル・インターナショナル社製

## 10

## アルネ・ヤコブセン

(Aarne Jacobsen 1902-1971)

「アント・チェア」

「Dining Chair Ant Chair」

1953

[Scandinavian・Modern]

アルネ・ヤコブセンはデンマークのコペンハーゲンの美術アカデミーに学び、1956年に名誉教授となる。住宅や公共施設などの建築から、家具・テーブルウェア・照明器具・テキスタイルなど多岐にわたる分野で活躍した。彼のデザインの特徴は工業化に対して機能と生産効率を追求しつつも、工業製品の持つ厳格さと、清潔感に満ちた造形を優雅な曲線により暖かみを感じさせる形態としている事である<sup>45)</sup>。

この「アント・チェア」はデンマーク医療組合<sup>46)</sup>のためにデザインされ、背と座は一体の圧縮成形のブナ材の合板で、脚は3本の鋼管から出来ている。鋼管と合板の弾力のある性質を十分に生かし、座り心地も良く、積み重ねて収納することも可能であり、小規模な現代住宅の中でも場所を取らない。そして安価で使用には十分耐える高品質である。背板の形が蟻に似ていることから「アント・チェア」と名付けられた。

…フリッツ・ハンセン社

## 11

## アルネ・ヤコブセン

(Aarne Jacobsen 1902-1971)

「スワン・チェア」

「Swan Chair」

1959

[Scandinavian・Modern]

「スワン・チェア」は「エッグ・チェア」と共にコペンハーゲンのスカンディナヴィア航空ホテルのインテリア用にデザインされた。スワン・チェアは、F・R・P<sup>47)</sup>の座と背が一体になったシェルにフォームラバーをかぶせ皮革でカバーし、鋳造

アルミの脚をつけたものである。座面は両側が大きく湾曲し肘掛けに連なる。その美しい曲線からなる彫刻の様に優美な形態が水鳥に似ていることから「スワン・チェア」と名付けられ、ウィーン第2回国際家具展で大賞を受賞した。この三次元の美しい優雅な曲線からなるロマンティックな形態は、機能主義的な家具デザインに対してのアンチ・テーゼとして高く評価された。

…フリッツ・ハンセン社製

12

ジョージ・ナカシマ

(George Nakashima 1905-)

「ナカシマ・アーム・チェア」

「Nakashima Arm (CN-103)」

1945

[Handy・Craft]

ジョージ・ナカシマは1905年ワシントン州スポーケン市でジャーナリストの父と官吏であった母との間に生まれ、1929年ワシントン大を卒業。さらにマサチューセッツ工科大学・大学院で建築と林学を修めた。ニーチェやシュパングラの思想に大きな影響を受けた。1934年東京のレーモンド建築事務所に入り建築家として活動し、インドに派遣され東洋神秘主義に魅せられ、2年間修道院生活を送る。1945年に家具作りを始め「民芸の模倣でもなく、墮落した工業デザインでもない」独自のデザインを目指し、「日本の伝統とアーリアン・アメリカンに源を持つ」彼の作品は次第に認められ、1952年にアメリカ建築家協会のゴールドメダルを受賞し、彼の「私は木から始める」という木の扱いの誠実さと、木匠としての精神性の深さは高く評価されている<sup>48)</sup>。

現代において科学技術が進歩し、生活の合理化が進行する中で、プライベートな生活にロマンティックな「夢」を求めるのは、現代人の欲求の一つであろう。彼の作品は銘木を使い伝統的な木工技術を駆使し、工芸的な味わいを持つものであり、形態も人々の「夢」を満たすロマンティックなものである<sup>49)</sup>。

…サクラファクトリー社製

13

チャールズ・イームズ

(Charles Eames 1907-1978)

「イームズ・シェル・チェア」

「Eames Shell Chair」

1950

[American・Modern]

イームズは、アメリカの代表的な家具デザイナーで1928年にワシントン大学建築科を卒業しエリエル・サーリネンの事務所に入りその息子エーロ・サーリネン (Eero Saarinen 1910-1961) と協同して椅子のデザインにあたった。1947年以降からは、ハーマン・ミラー社の家具デザインで活躍した。

この椅子の原型は、イームズとエーロ・サーリネンが協同で設計し、1940年のニューヨーク近代美術館主催の「室内装飾における有機的デザイン」コンペに出品し受賞した<sup>50)</sup>、原寸大の石膏モデルである。彼は最初材料に合板を想定していたが成形工程中に材料の伸びがないため立体的な複合形を作るには、前加工で成形された細い帯状の単板を連続的に人手で並べざるを得ないため大量生産に不向きでこの方法を断念した。しかし成形合板の技術の可能性を追求し座と背を2つに分けた方式に切り替え、ハーマン・ミラー社で合板と金属を組み合わせた椅子を生産した。1948年に彼は近代美術館から研究助成金を受け再びシェル構造の研究を始め、自動車のフェンダーのような鋼板の絞り加工を使いシェルを作ったが、この工法ではコストがかかりすぎることが分かり断念した。1950年に彼はゼニス・プラスチック社のガラス繊維強化プラスチックで出来たクリスマスツリーの台を見てシェル成形を可能とする方法を発見し、そしてこの方法では一組の型で成型できるため、コストも安くできた<sup>51)</sup>。

イームズはそうして作った三次元のシェル成型の本体（プラスチックをガラス繊維で補強しシートとバックを一体化した）に視覚的に対比する細

いクロミウム鋼棒の脚を取り付け、軽快で新しい感覚を示す椅子デザインにまとめた<sup>52)</sup>。彼は機能性の厳しい追求と新材料を適用し、椅子デザインの発展と革新に大きな役割を果たした。

…ハーマン・ミラー社製

## 14

## ジオ・ポンティ

(Gio Ponti 1891-1971)

「ポンティ・ポンティ」

「Ponti Ponti」

1971

[Itarian・Modern]

ジオ・ポンティはイタリアのミラノ工科大学を卒業し建築家として活躍し、絵画、家具、工業デザイン、陶器、家庭用品に至るまでデザインし、合理主義デザインを唱え、機能主義を基本としてイタリアの近代合理主義運動に尽力した。

彼は「真実の形態」というコンセプトに基づき、全ての因習を排除し、機能に忠実なことで得られる形態を考え実践した<sup>53)</sup>。その造形の斬新さは世界のデザインに影響を与えた。彼は、モダンデザインからポストモダンと様々な造形を使い分け、近代デザイン運動の発展に寄与し、1928年には、雑誌「ドムス」を発行し、建築とデザインの啓蒙と発展に尽くした。

この「ポンティ・ポンティ」(ガブリエラともいう)は鋼材をX型に組合せ座と背を構成し、座を構成した鋼材のフレームはゆるやかに曲線を描き後脚となり、前脚はそのまま直線に伸びて背をなす。座と背には皮革のカバーを付け、軽やかな雰囲気と形態の面白さを出している。座と背の交差した部分のネジを外せばスペースを取らず収納することが出来る。このようなX型の形態は様々なデザイナーに試みられ、オーレ・ギエロー・クンドセンのガーデン・チェアやウェグナーの1949年のオーク材と籐張りのフォールディング・チェア、剣持 勇のガマ椅子など、それぞれ、デザイナーの造形意識によって形態は異なり興味深い。

ポンティはこの他に「スーパー・レジェーラ」

という超軽量の椅子もデザインし、その椅子は、トネリコ材を構造材として、脚部と背部は断面を三角形にすることにより断面積を最小とし、わずか1.95 kgしかない。この超軽量椅子はコンパッソドーロ賞を受賞した。

…パルッコ社製

## 15

## 新居 猛

(Takeshi Nii)

「ニイ・チェア」

「Nii Chair」

1972

[Japanese・Modern]

細い鋼管フレームを座と背・脚に用い、キャンバス地を背から座に張り、木材の丸棒をほぼ水平な肘掛けに構成した椅子で、脚は前後でX字形をなし、きわめて軽快であると共に、おおらかなフォルムを形成している。折り畳むことにより収納にも優れる。脚の底部を曲線として、ロッキングチェアにしたものもある。1974年ニューヨーク近代美術館の永久展示品に選定された。ヨーロッパで模倣されるなど国際的に話題になった事がある<sup>54)</sup>。

…ニイファニチャー社製

## 16

## マーク・ニューソン

(Mark Newson 1963-)

「エンブリオ・チェア」

「Embryo Chair」

1988

[New・Wave]

ニューソンは1963年オーストラリア・シドニー生まれ、1984年シドニー・カレッジ・オブ・ジ・アートを卒業、1985年にグラント・カウンシル・グラントを受賞する。ロンドンのインテリア・デザイナー、ロン・アラッドの事務所に入所しその後独立、家具デザインを手掛ける。彼は大学で彫刻とジュエリーデザインを専攻、家具の常識を超えた曲線とその構成は類を見ないものである。

彼の家具の制作は原寸模型を作り、それを基に図面を起こし生産するので、曲線とその丸みのある形態は独特である<sup>55)</sup>。家具の機能性を追求したデザインに対してその個性的な形態で空間を演出する事に重点を置いている。

「エンブリオ・チェア」のエンブリオとは「胎児」を意味し、発泡ウレタンの座・背にニットのカバーリングをし、スチールパイプの脚を付けたものである<sup>56)</sup>。そのオーガニックな曲線をニットの優しいテクスチャーで構成しそのロマンチシズムあふれる形態は、アルネ・ヤコブセンの「エッグ・チェア」や「スワン・チェア」を思い起こさせる

…イデー社製

### 文献

- 1) 橋本太久麿『近代デザインの歩み』増訂版 理工学社 1989 P.3-4
- 2) ニコラス・ペプスナー『モダン・デザインの展開』みすず書房 1976 P.72
- 3) 鍵和田務編『西洋家具集成』講談社1989 P.209
- 4) K・マンガ 宿輪吉之典訳『トーネット曲木家具』鹿島出版会 1985 P.20~26
- 5) K・マンガ 前掲書 P.27~28
- 6) K・マンガ 前掲書 P.28
- 7) K・マンガ 前掲書 P.28~34
- 8) K・マンガ 前掲書 P.34
- 9) K・マンガ 前掲書 P.42
- 10) K・マンガ 前掲書 P.46~47, P.49, P.54~61
- 11) K・マンガ 前掲書 P.74
- 12) K・マンガ 前掲書 P.60
- 13) ベヴィス・ヒリヤー 石崎浩一郎 小林陽子訳『20世紀の様式』丸善(株)1986 P.44~53 P.44
- 14) R. Billcliffe『C.R. Mackintosh The Complete Furniture』Cameron & Tayieur Limited 1979
- 15) 木村博昭編『CHARLES RENNIE MACKINTOSH』プロセスアーキテクト 50号 1984 プロセスアーキテクト社 P.30~33
- 16) ロジャー・ビルクリフ 横川善正訳『マッキントッシュ・インテリア・アーティスト芸術空間としての家具』芳賀書店 1988 P.129~132
- 17) 小野二郎『装飾芸術・ウィリアム・モリスとその周辺』青土社 1979 P.258
- 18) ロジャー・ビルクリフ 前掲書 P.77
- 19) 橋本太久麿 前掲書 P.7-5~7-9
- 20) W・J・R・カーティス 五島朋子 澤村明 末廣香 織共訳『近代建築の系譜』鹿島出版会 1990 上巻 P.126~127
- 21) 鍵和田務編 前掲書 P.220
- 22) 押野見邦英『インテリア・ウォッチング』鹿島出版会 1985 P.120
- 23) 鍵和田務編 前掲書 P.220
- 24) スタニスラウス・フォン・モース 住野天平訳『ル・コルビジェの生涯』彰国社 1982 P.87
- 25) レナート・デ・フスコ 横川正訳『ル・コルビジェの家具』A・D・A・EDITA 1978 P.68
- 26) K・マンガ 前掲書 P.178
- 27) 押野見邦英 前掲書 P.120
- 28) K・マンガ 前掲書 P.173
- 29) S・ギーディオ ン GK 研究所・榮久庵祥二訳『機械化の文化史』鹿島出版会 1976 P.456~469
- 30) 鍵和田務編 前掲書 P.218~219
- 31) 大廣保行『現代の家具と照明』鹿島出版会 1989 P.29~30
- 32) K・マンガ 前掲書 P.176
- 33) 大廣保行 前掲書 P.30
- 34) 押野見邦英 前掲書 P.111~112・P.121
- 35) W・J・R・カーティス 前掲書下巻 P.483~492
- 36) ジェイ・ダブリン 金子至 岡田朋二 松村英男訳『製品開発とデザイン』丸善 1976 P.42~43
- 37) S・ギーディオ ン 前掲書 P.470
- 38) ジェイ・ダブリン 前掲書 P.42~43
- 39) 光藤俊夫『世界の椅子絵典』彰国社 1986 P.104
- 40) 読売新聞社編『木の家具』読売新聞社 1981 P.51~57
- 41) エリック・ザーレ 藤森健次訳『スキャンジナビアデザイン』彰国社 1964 P.87
- 42) ジェイ・ダブリン 前掲書 P.79~80
- 43) エリック・ザーレ 前掲書 P.87
- 44) エリック・ザーレ 前掲書 P.87
- 45) 内田繁『椅子の時代』光文社 1988 P.119~122
- 46) 内田繁 前掲書 P.120
- 47) 大廣保行 前掲書 P.64に拠る。他の文献にはグラスファイバー(硬質発泡樹脂)という場合もある。
- 48) 読売新聞社編 前掲書 P.88
- 49) 鍵和田務編 前掲書 P.224
- 50) 鍵和田務編 前掲書 P.212
- 51) ジェイ・ダブリン 前掲書 P.70~71

- 52) 鍵和田務編 前掲書 P. 212
- 53) 内田繁 前掲書 P. 127
- 54) 大廣保行『椅子のデザイン小史』鹿島出版会 1986  
P. 123
- 55) 『室内』No. 409 1989 1月号 P. 27
- 56) 『室内』No. 409 1989 1月号 P. 27

**参照文献**

- 清家清編『インテリアデザイン辞典』朝倉書店 1981
- 大廣保行『椅子のデザイン小史』鹿島出版会 1986
- 大廣保行『現代の家具と照明』鹿島出版会 1989

表1.1 芸術学部椅子資料一覧 (1990年12月現在)

番号	作 者	作 品 名	備品番号	W*D*H/S・H (cm)
1	ミヒヤエル・トーネット (Michael Thonet 1796-1871)	トーネット「No.14」1852 曲げ木・籐張り トーネット社	ウE89-11	43・52・84/46
2	ミヒヤエル・トーネット (Michael Thonet 1796-1871)	ロッキング・チェア「No.7027」(レプリカ)1860 曲げ木・籐張り 秋田木工社	ウC49-4	50・108・101/43
3	チャールズ・レニー・マッキントッシュ (Charles Rennie Mackintosh 1868-1928)	「ヒルハウス ハイバック・チェア」1902 トネリコ材・ベルベット カッシーナ社	ウC58-4	41・39・140/45
4	フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright 1867-1959)	「ミッドウェイ, 1」1914 サクラ材・布張り カッシーナ社	ウE89-6	52・48・87/45.5
5	ヘーリット・トーマス・リートフェルト (Gerrit Thomas Rietveld 1888-1964)	「レッドアンドブルー・チェア」1918 ブナ材・合板アニリン仕上げ 不明	ウE89-14	65・83・87/33
6	ヘーリット・トーマス・リートフェルト (Gerrit Thomas Rietveld 1888-1964)	「ジグザグ・チェア」1934 ブナ材 カッシーナ社	ウE58-2	37・43・74/43
7	マルセル・ブロイヤー (Marcel Breuer 1902-1982)	「ワシリー・チェア」1925 鋼管・皮革張り ガヴィーナ (ノル社のブランド)	リG50-61	79・70・73/45
8	マルセル・ブロイヤー (Marcel Breuer 1902-1982)	「チェスカ・チェア」1928 鋼管・籐張り ガヴィーナ (ノル社のブランド)	リG50-62	47・60・78/43
9	マルセル・ブロイヤー (Marcel Breuer 1902-1982)	「ラウンジ・チェア」 鋼管・籐張り トーネット社	ウE62-2	65・83・84/35
10	ル・コルビジエ・シャルロット・ベリアン ピエール・ジャンヌレ (Le Corbusier 1887-1965)	「角度調節自在の寝椅子LC-4」1928「カウボーイ・チェア」 「シェーズ・ロング」鋼管・皮革張り ホームライン社	ウE89-15	59・160・85
11	ミース・ファン・デル・ローエ (Mies Van Der Rohe 1886-1969)	「バルセロナ・チェア」1928 ステンレススチール・皮革張り ノル・インターナショナル	ウC58-7	75・75・75/42
12	アルヴァ・アアルト (Alvar Aalto 1898-1976)	「アーム・チェア41」1929「パイミオ・チェア」 積層材・成型合板 アルテック社	ウE59-1	61・50・68/29
13	アルヴァ・アアルト (Alvar Aalto 1898-1976)	「サイド・チェア」1933 プライウッド・オールパーチ アルテック社	ウE60-3	38・42・78/44
14	アルヴァ・アアルト (Alvar Aalto 1898-1976)	「スタッキング・スツール」1954 プライウッド・オールパーチ アルテック社	ウE60-4.5 2脚あり	φ35/43.5
15	アルヴァ・アアルト (Alvar Aalto 1898-1976)	「X600 スツール」1954 シートアッシュ・集成材 アルテック社	ウE89-12	φ38/44
16	ハンス・J・ウェグナー (Hans J. Wegner 1914- )	「ピーコック・チェア」1947「アロー・チェア」 トネリコ材・チーク材・縄編み ヨハネス・ハンセン社	ウE61-1	76・76・104/3
17	ハンス・J・ウェグナー (Hans J. Wegner 1914- )	「チャイニーズ・チェア」1947 トネリコ材・縄編み P.Pモブラー社	ウE89-13	55・55・82/45
18	ハンス・J・ウェグナー (Hans J. Wegner 1914- )	「ザ・チェア」1949 チーク材・籐張り ノル・インターナショナル社	ウC49-2	62・52・76/44
19	ハンス・J・ウェグナー (Hans J. Wegner 1914- )	「パチェラーズ・チェア」1953 チーク材 ヨハネス・ハンセン社もしくはノル社	ウE57-2	50・53・95/43
20	ハンス・J・ウェグナー (Hans J. Wegner 1914- )	「アーム・チェア」 白ラッカー塗装 GETAMA 社	ウE89-16	54・45・70/42

表1.2 芸術学部椅子資料一覧 (1990年12月現在)

番号	作 者	作 品 名	備品番号	W*D*H/S・H (cm)
21	アルネ・ヤコブセン (Aarne Jacobsen 1902-1971)	「アント・チェア」1953 圧縮成形のブナ材の合板・鋼管 フリッツ・ハンセン社	ウ C 49-1	48・48・77/44
22	アルネ・ヤコブセン (Aarne Jacobsen 1902-1971)	「スワン・チェア」1959 F・R・P・皮革・アルミ フリッツ・ハンセン社	ウ E 89-9	74・68・75/38
23	ポーム・ケヤホルム (Poul Kjaerholm 1929-1980)	「チェア PK25」 スチール・縄 フリッツ・ハンセン社	ウ E 89-1	69・68・73/38
25	カール・ブルーノ・マトソン (Karl Bruno Mathsan 1907- )	「EVA チェア T102」 積層ブナ材・ヘンプウェービング マトソン・インターナショナル社	ウ 89-2	58・65・83/39
26	チャールズ・イームズ (Chares Eames 1907-1978)	「イームズ・ラウンジ・チェアオットマン」1956 成形合板・アルミ・皮革張り ノル・インターナショナル社	ウ E 60-1・2	86・84・83/38 66・58・44.5
27	チャールズ・イームズ (Chares Eames 1907-1978)	「イームズ・シェル・チェア」1950 スチールロッド・FRP・ビニールレザー ハーマン・ミラー社	リ G 46-2	64・60・77/43
28	チャールズ・イームズ (Chares Eames 1907-1978)	「ラウンジ・チェア」 アルミ・皮革張り・布張り ハーマン・ミラー社	リ G 46-1 ウ G 48-97 2脚あり	73・63・75/39
29	エーロ・サーリネン (Eero Saarinen 1910-1961)	「ペDESTスタイル・チェア」1956「チューリップ・チェア」 強化プラスチック・アルミ ノル・インターナショナル社	ウ E 62-1	66・60・79/43
30	ハリー・ベルトイヤー (Harry Bertioia 1915-1978)	「ダイヤモンド・チェア」1952 スチールワイヤー・ラバーパッド ノル・インターナショナル社	ウ C 49-3	85・71・77/40
31	チャールズ・ポロック (Charles Pollock 1930- )	「アーム・チェア657」1960 スチールパイプ・皮革・樹脂材 ノル・インターナショナル社	ウ C 58-2	63・68・71/41
32	ワーレン・プラットナー (Warren Platner 1919- )	「アーム・チェア」1964 スチールワイヤー・FRP シェル・布張り ノル・インターナショナル社	CC 58-3	67・56・74/48
33	ジオ・ポンティ (Gio Ponti 1891-1971)	「トネリコ・チェア」 トネリコ材・皮革 カッシーナ社	ウ E 57-3	40・43・83/43
34	ジオ・ポンティ (Gio Ponti 1891-1971)	「スーパー・レジェーラ」1952 トネリコ材・籐張り カッシーナ社	ウ C 58-5	41・47・83/45
35	ジオ・ポンティ (Gio Ponti 1891-1971)	「ポンティ・ポンティ」 鋼鉄・皮革 バルッコ社	ウ E 89-3	59・60・100.5/26
36	柳 宗理 (Munemichi Yanagi 1915- )	「バタフライ・スツール」1956 成形合板 天童本工社	ウ E 48-5	42・31・39/34
37	ジョージ・ナカシマ (George Nakasima 1905- )	「ナカシマアーム・チェア」1945 ウォールナット材 サクラファクトリー社	ウ E 58-1	80・65・84/34
38	渡辺 力 (Riki Watanabe 1911- )	「リキ・ダイニング・アーム・チェア」 ナラ材 インテリアセンター社	ウ E 88-7	62・55・90.5/40
39	剣持 勇 (Isamu Kenmochi 1912-1971)	「ラウンジ・チェア」1960 籐編み・置きクッション やまかわラタン社	ウ E 89-5	81・78・72/33
40	新居 猛 (Takesi nii )	「ニー・チェア」1972 スチールパイプ・キャンパス地・木 ニイファーニチャー社	ウ E 48-7	62・77・84

表1.3 芸術学部椅子資料一覧 (1990年12月現在)

番号	作 者	作 品 名	備品番号	W*D*H/S・H (cm)
41	ヴィコ・マジストレッティ (Vico Magistretti 1920- )	「セレーネ・チェア」1969 強化ポリエステル アルテミデ社	ウE57-4 2脚あり	39・50・76/43
42	P・ゲッティ チェザーレ・パオリーニ フランコ・テodororo (Picaro Gatti C Paolini F Tendoro)	「サッコ」1968 布・ポリウレタン細粒子 ザノッタ社	ウC49-5	
43	ガエ・オウレンティ (Gae Aulenti 1954- )	「アーム・チェア」1975 アルミ押出成型・布張り ノル・インターナショナル社	ウC58-1	80・86・75/41
44	カルロ・バルトリ (Carlo Barutori )	「バルトリ・チェア」 プラスチック カルテル社	ウE62-16	45・41・73/43
45	デューク・スタシュ (Dukes Sutashy )	「エフェボ・スツール」1970 プラスチック アルテミデ社	ウC49-19 2脚あり	42・44・40/28
46	アンドレス・ヴァン・オンク (Andres Van Onck )	「クリケット」1958 ABS樹脂・スチール マジス社	ウE62-15	40・53・82/45
47	ペーター・オピスビク ハンス・クリスチャン・メンショ・エル (Peter Opisvik)	「バランス・チェア」1979 積層合板・クッション STOKKE 社	ウE89-4	52・72・46
48	マーク・ニューソン (Mark Newson 1963- )	「エンブリオ・チェア」1988 スチールパイプフレーム・発泡ウレタン・ニット イデー社	ウE89-8	80・91.5・80/33



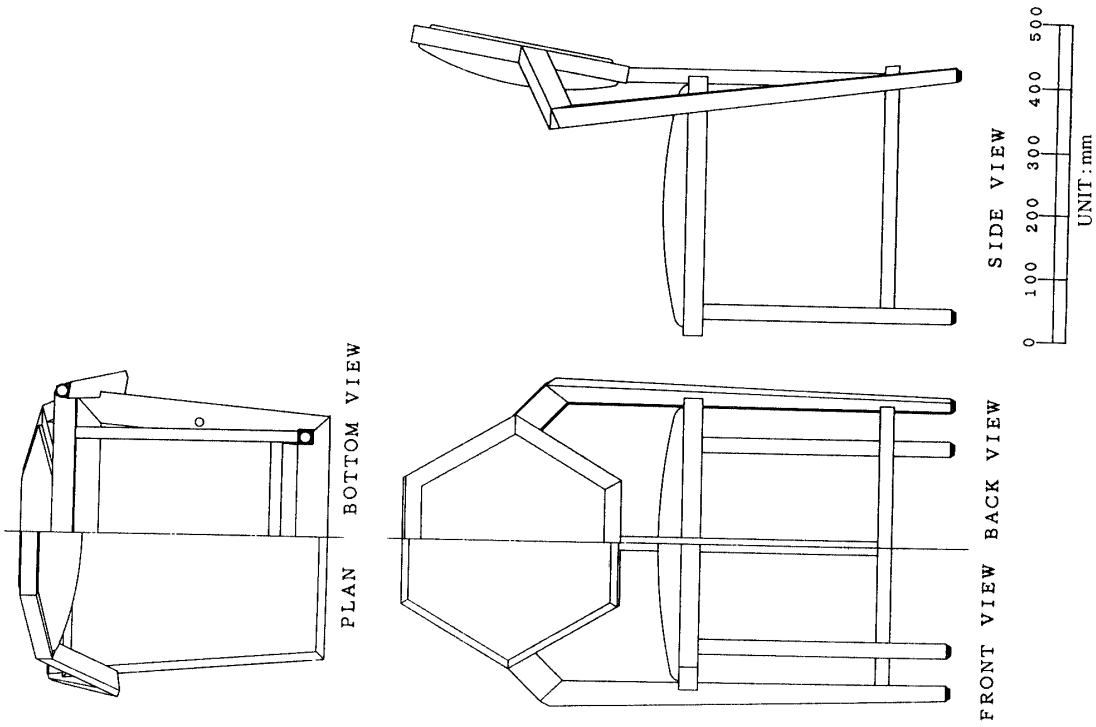
付図1

1

ミヒャエル・トーネット  
「トーネット No.14」1859  
備品番号：ウE89-11

図：Thonet Bentwood & Other Furniture THE 1904  
ILLUSTRATED CATALOGUE Dover Publica-  
tions, Inc 1980 P.3

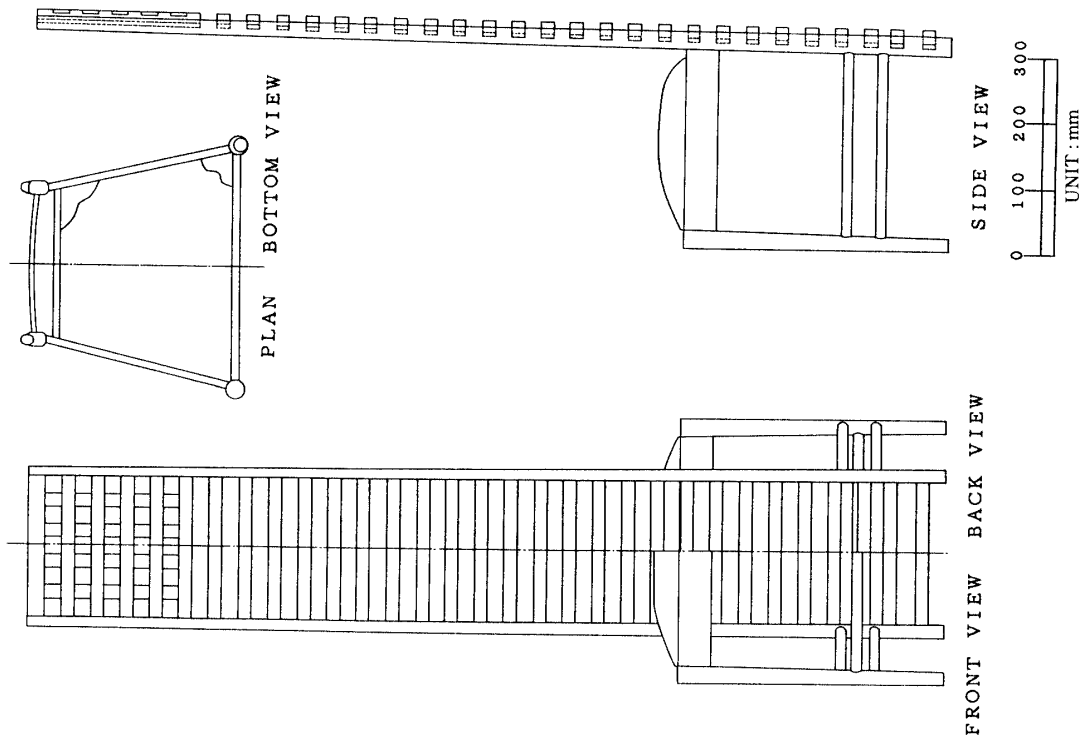




付図 3

フランク・ロイド・ライト  
「ミッドウエイ I.」 1914  
備品番号: UE89-6

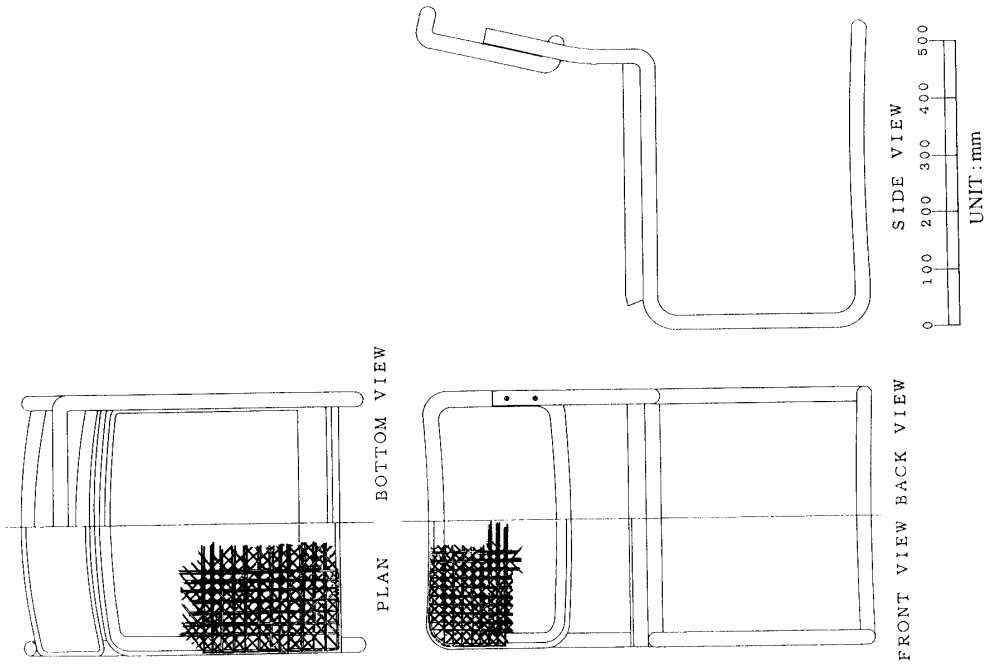
製図: 白水富美雄



付図 2

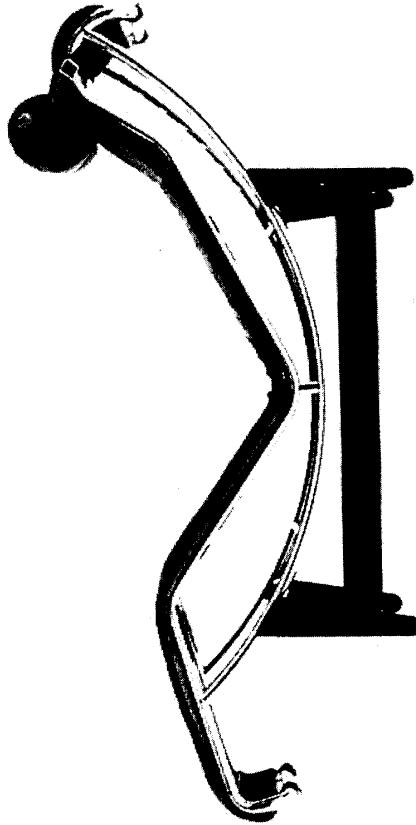
チャールズ・レニー・マツキントッシュ  
「ヒルハウス ハイバック・チェア」 1902  
備品番号: UC58-4

製図: 古賀龍生



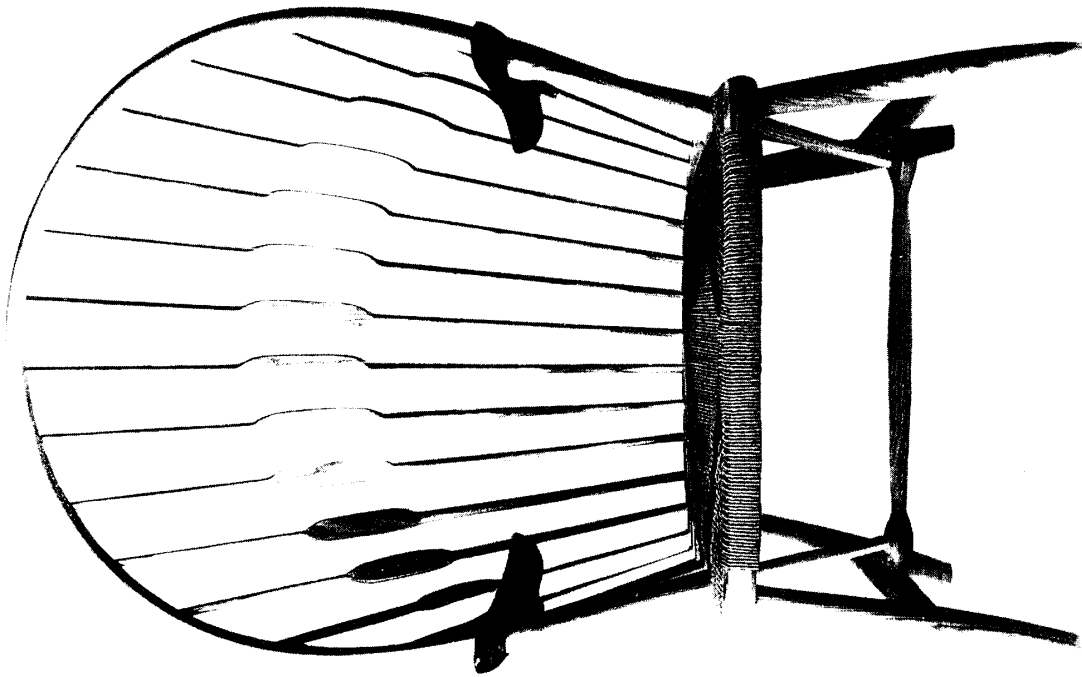
付図 5

マルセル・ブロイヤール  
 「チェスカ・チェア」1928  
 備品番号：リG50-61  
 製図：鶴田博巳



付図 4

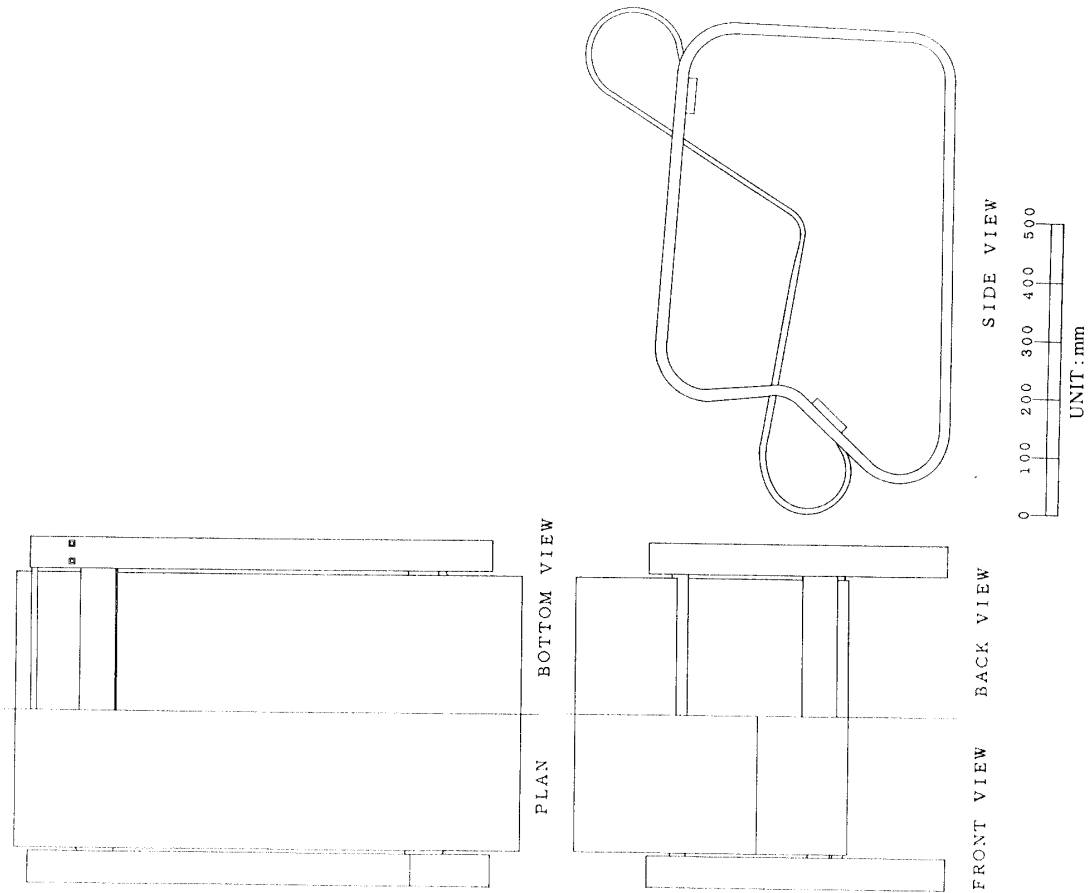
ル・コルビジエ  
 シャルロット・ペリアン ピエール・ジャンヌレ  
 「角度調節自在の寝椅子」1928  
 備品番号：ウC58-2  
 写真：John Pile 『FURNITURE MODERN+POST-  
 MODERN』 John Wiley & Sons, Inc. 1990 P.63  
 Photograph Atelier International, Inc. New York



付図 7

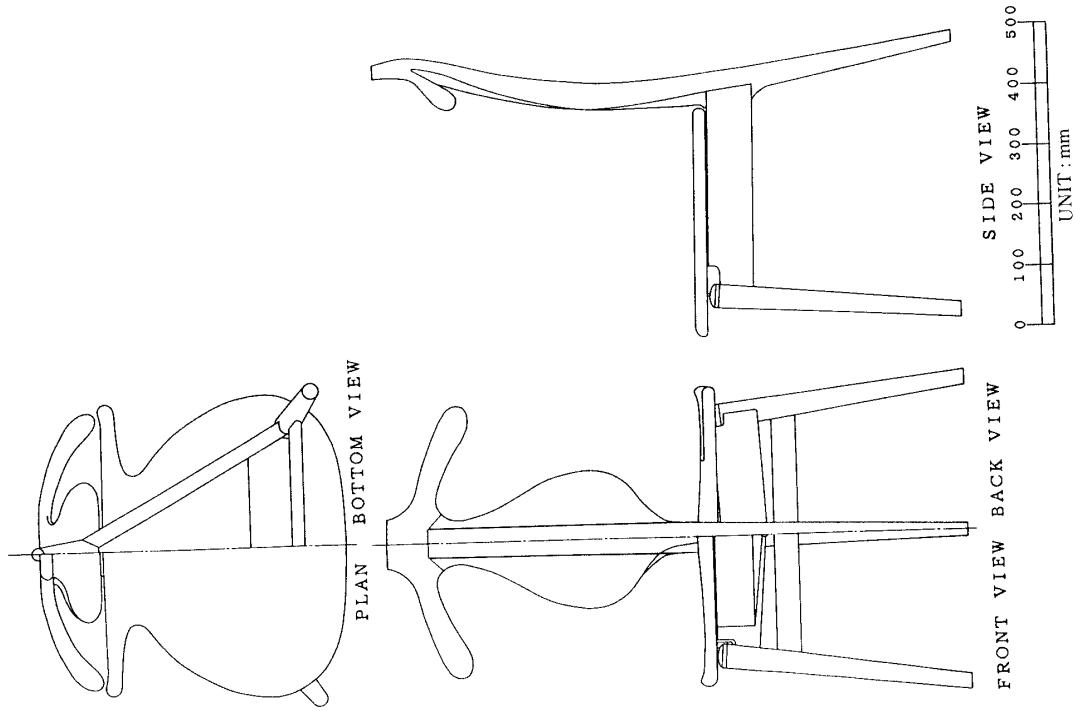
ハンス J. ウェグナー  
「ピーコック・チェア」1947  
備品番号：ウ E57-2

写真：Eric Larrabee Massimo Vignelli 『Knoll Design』  
Harry N. Abram, Inc. 1981 P. 193



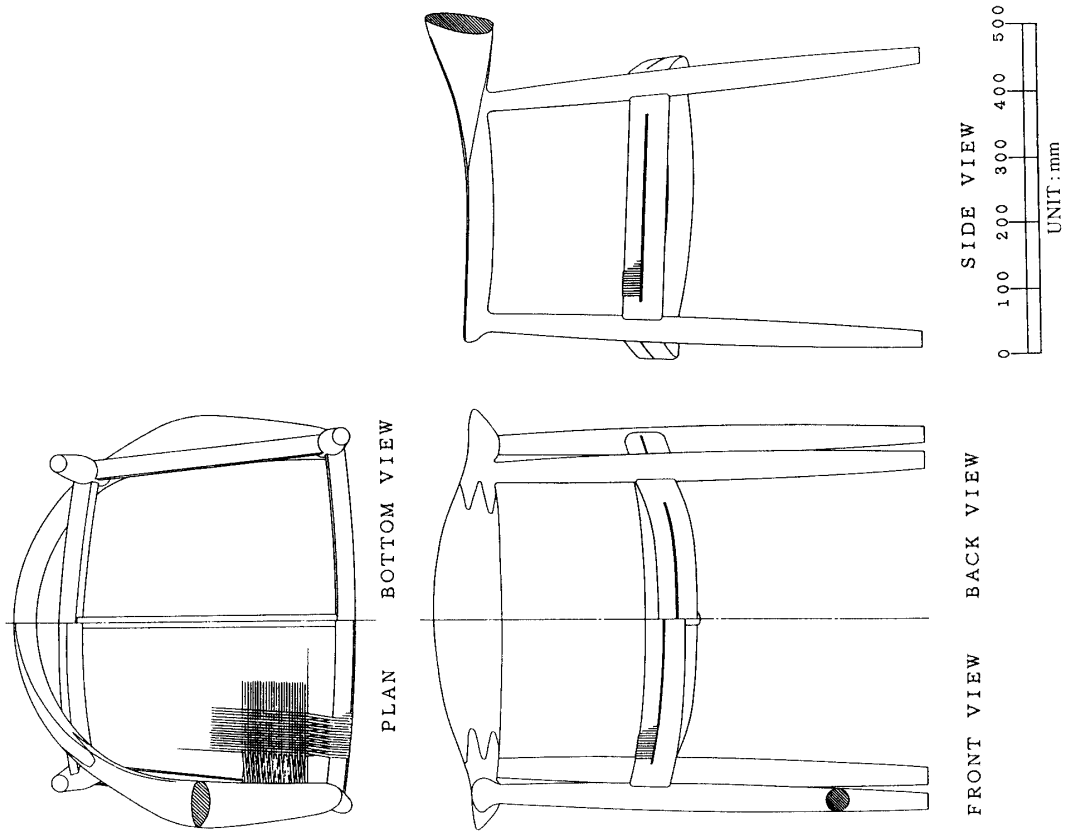
付図 6

アルヴァ・アアルト  
「アーム・チェア41」1929  
備品番号：ウ E59-1  
製図：江上竜生



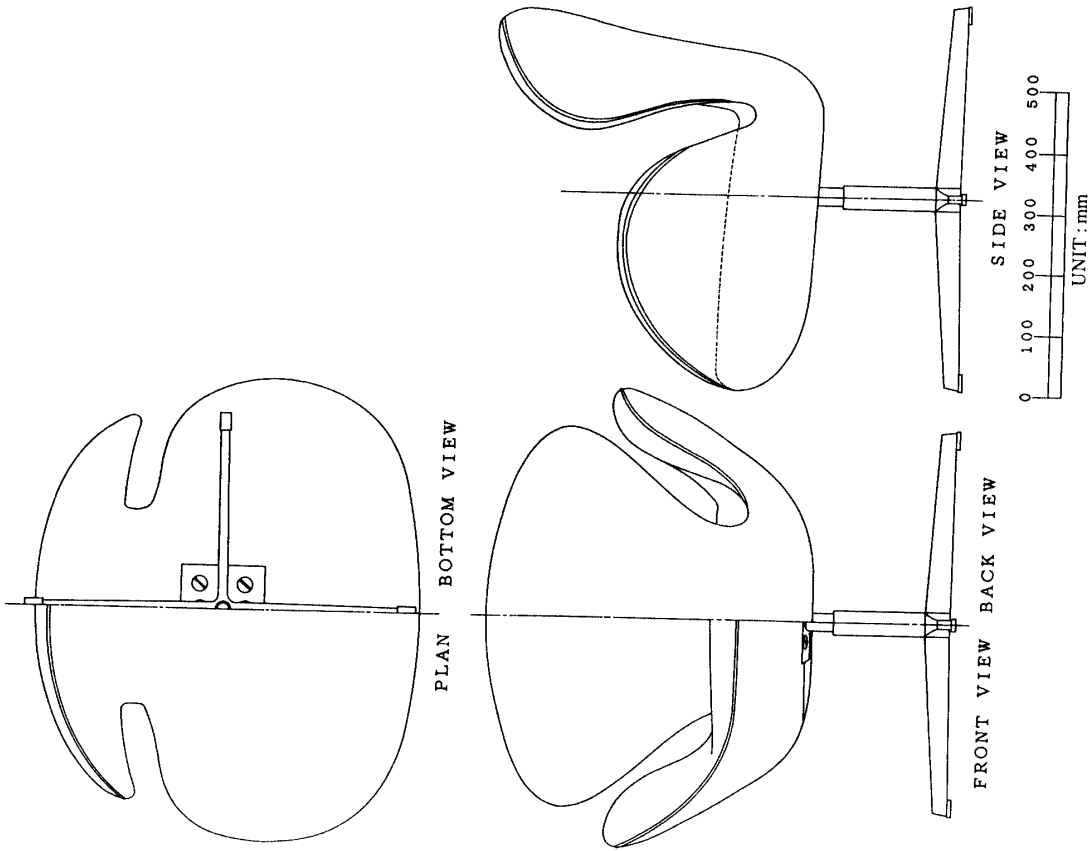
付図9

ハンスJ. ウェグナー  
 「バチェラーズ・チェア」 1953  
 備品番号: UE57-2  
 製図: 荒木 崇



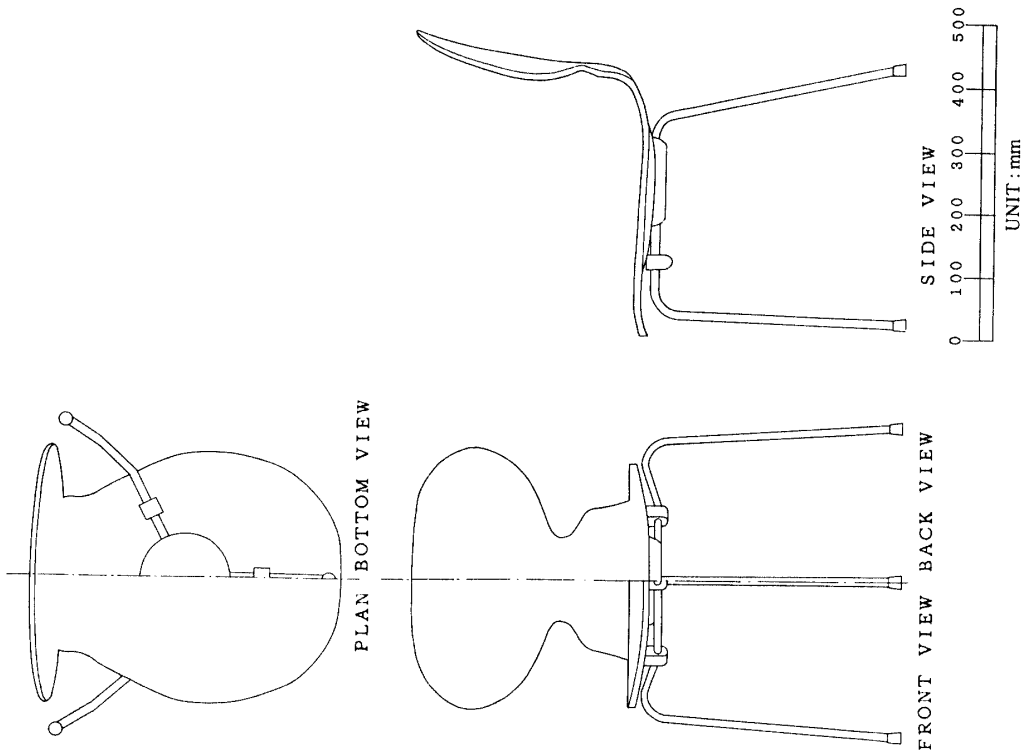
付図8

ハンスJ. ウェグナー  
 「ザ・チェア」 1949  
 備品番号: UC49-2  
 製図: 新庄章史



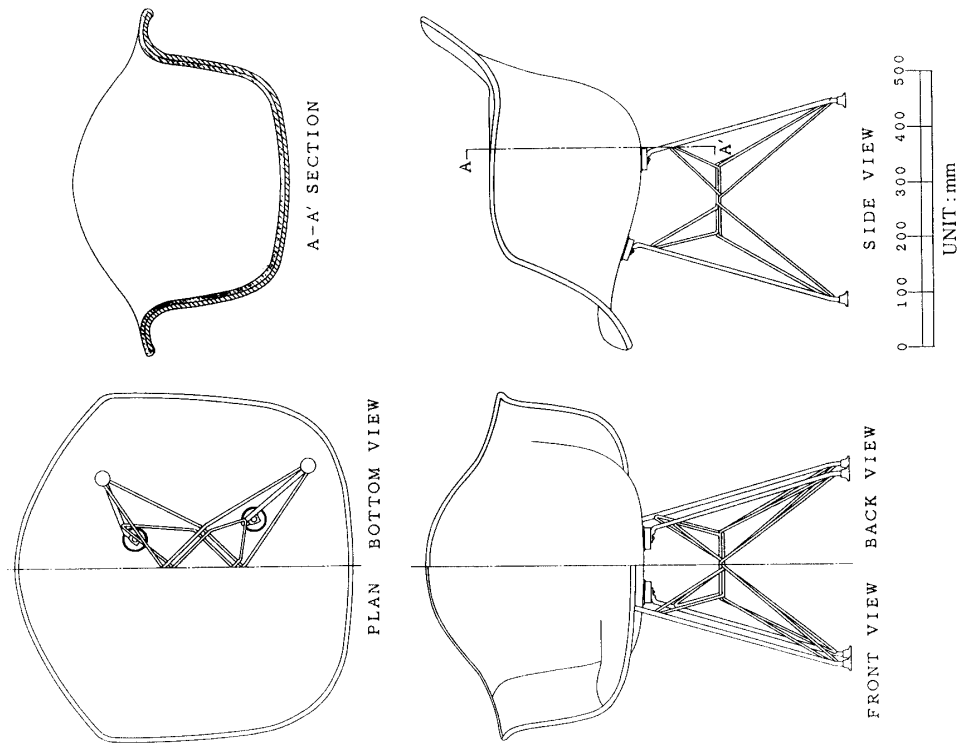
付図11  
11

アルネ・ヤコブセン  
「スワン・チェア」1959  
備品番号：ウE89-9  
製図：川島修一



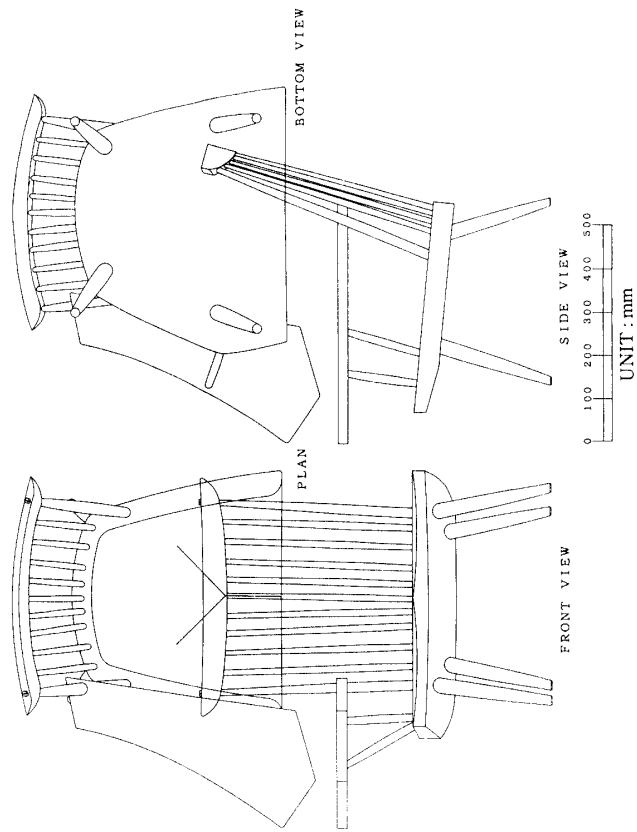
付図10  
10

アルネ・ヤコブセン  
「アント・チェア」1953  
備品番号：ウC49-1  
製図：大神泰子



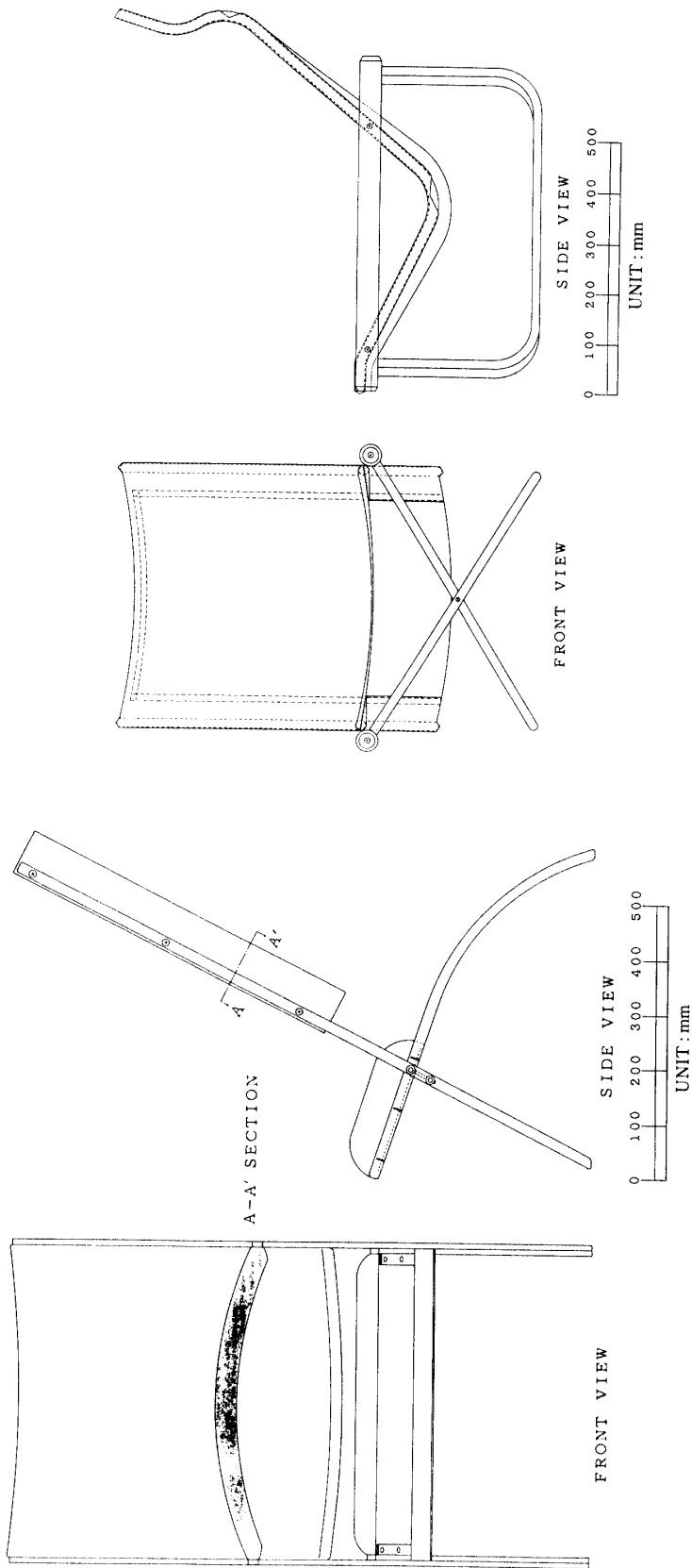
付図13  
13

「イームズ・シエル・チェア」 1950  
 チャールズ・イームズ  
 製品番号：リG46-2  
 製図：柴村毅彦



付図12  
12

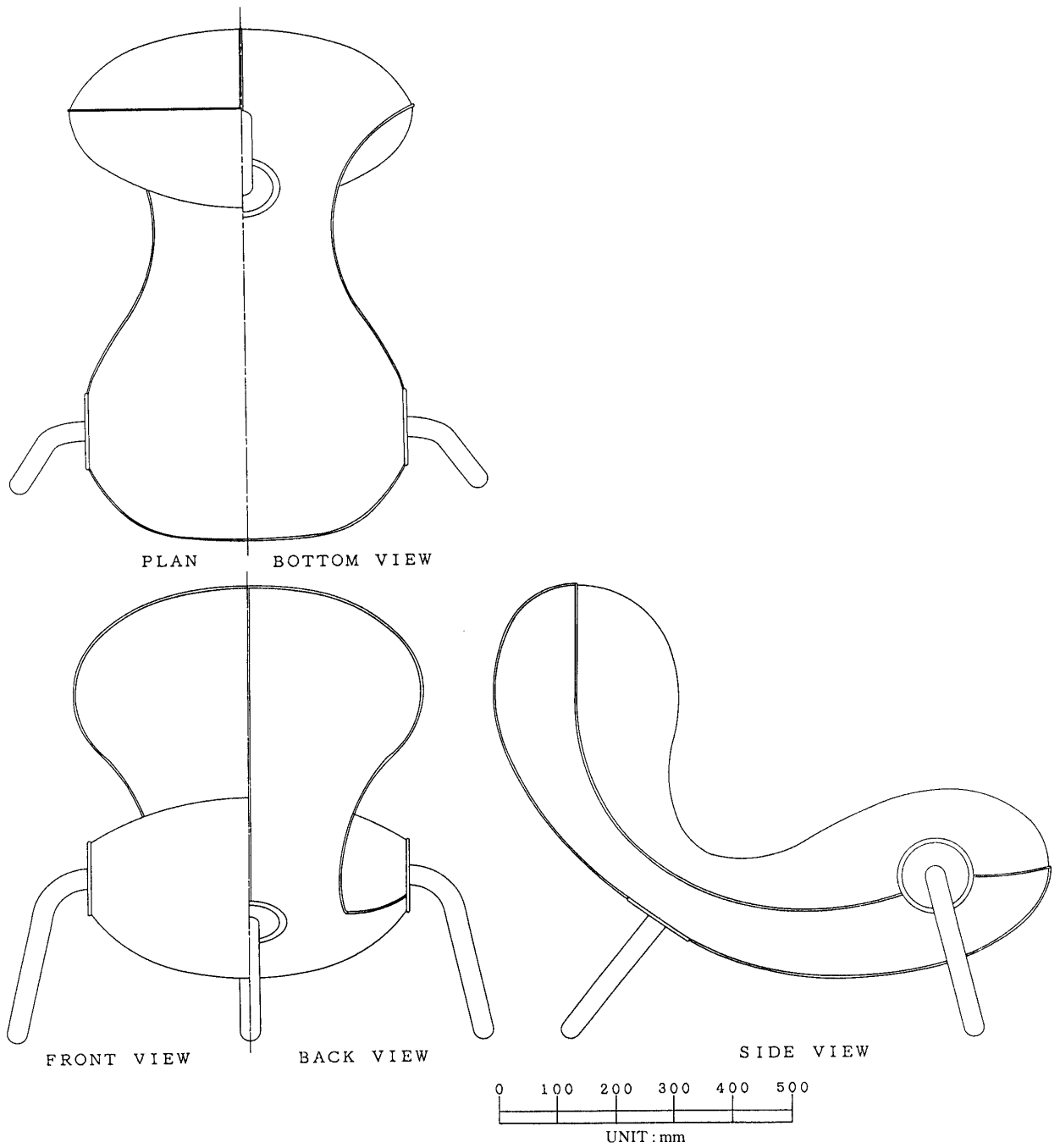
「ナカシマ・アーム・チェア」 1945  
 ジョージ・ナカシマ  
 製品番号：ウE58-1  
 製図：茂村巨利



付図14  
14

ジオ・ボンテイ  
「ボンテイ・ボンテイ」1971  
備品番号：ウE89-3  
製図：志原朱美

付図15  
15  
新居 猛  
「ニイ・チェア」1972  
備品番号：ウE48-7  
製図：小金丸明美



付図16  
16  
マーク・ニューソン  
「エンブリオ・チェア」1988  
備品番号：ウE89-8  
製図：楠 千春